

Fulfelic Compass

青山愛

代表



070-3329-1880

fulfelic.compass@gmail.com

ビジョン

医療従事者のウェルビーイングを高め、つながりと信頼を基盤に感謝と貢献を循環させ、患者と家族が安心できる笑顔あふれる医療環境を創り出し、幸せの連鎖で社会を豊かにします。

看護師として循環器・心臓外科など最前線の現場を経験し、アイルランドでの学びを経て起業した青山さん。現在は「看護師コーチング事業」を通じて、医療従事者のウェルビーイングと組織改革を支援しています。訪問看護やクリニック経営に活かせるコミュニケーション術やチームづくりを提案し、働く人も患者も幸せになれる医療の未来を目指します。（2025年8月取材）

自動車開発の夢から看護の道へ

はじめに、青山さんが看護師を目指されたきっかけを、詳しくお聞かせください。

意外に思われるかもしれませんが、中学生時代の夢は自動車開発でした。出身が愛知県ということもあり、世界に誇る自動車産業の一員になりたかったんです。しかし、物理の授業で大きな壁にぶつかり、夢を断念せざるを得ませんでした。高校生になり進路を決めるにあたり、頭に浮かんだのが看護師の道でした。

家族の中で母と祖母が看護の道に進んでおり、母から仕事の愚痴を聞くことはほとんどなく、幼い頃は大変さよりも、専門職として人の役に立つ格好良い姿を見ていました。医療はとても身近な存在で、怪我をすれば母が勤めるクリニックで縫ってもらうこともありましたね。生物や化学といった理系科目は得意分野でしたし、最終的には「手に職を」という現実的な視点も後押しとなり、看護の世界へ飛び込むことを決意しました。

看護学生時代は、想像以上に過酷だったそうですね。

はい、三重県の県立看護大学に進学したのですが、実習は本当に大変でした。大学附属病院がなかったため、三重県内の様々な病院へ毎日通う必要があったんです。長い時は電車で1時間以上かけて移動し、帰宅後は深夜までレポートや課題に追われる日々。睡眠時間を削って必死に食らいついていた記憶があります。

最初の職場では、どのような経験が印象に残っていますか？

卒業後は、四日市市内の病院で循環器内科、糖尿病、腎臓病の混合病棟に配属されました。新人ながらカテーテル室も兼務し、まさに医療の最前線で多くのことを学びました。そこで4年ほど経験を積んだ後、「循環器看護をもっと極めたい」という思いが強くなり、国内でも有数の症例数を誇る名古屋の心臓専門病院（ハートセンター）へ転職しました。そこでの経験が、私の看護観を大きく形作ることになります。



専門性を高める充実したキャリアの中で、なぜ起業という全く違う道を意識するようになったのですか？

ハートセンターでの仕事は、専門性を追求できるやりがいのあるものでしたが、同時に想像を絶するほど過酷でした。緊急手術は日常茶飯事で、定時に帰れる日はほぼ皆無。休日も学会や勉強会に追われ、心身ともに休まる暇がありませんでした。気づけば30歳を目前にし、「私の人生、このままでいいのだろうか？」と、燃え尽き寸前の状態で自問自答するようになっていたのです。



当時の心境を、具体的に教えていただけますか？

仕事自体は好きでしたが、あまりの多忙さに心がすり減っていく感覚でした。休みの日も頭の中は仕事のことでいっぱい、プライベートとの境界線が曖昧になっていました。このままでは心身を壊してしまう…人生の方向性を一度リセットする必要があると感じたんです。そんな時、心の片隅にあったワーキングホリデーへの憧れが再燃しました。「一度きりの人生、後悔したくない」。その一心で看護師を辞め、アイルランドへ渡るという大きな決断をしました。

アイルランドでの生活は、青山さんの価値観にどのような変化をもたらしましたか？

文字通り、根底から覆されました。現地で出会ったフランス人の友人に「どうして日本人はそんなに働くの？人生そのものが仕事みたいだね」と言われた時、頭を殴られたような衝撃を受けました。彼らにとって仕事は人生を楽しむための一つの手段であり、家族や友人との時間こそが何よりも大切でした。残業を手伝おうとしたら「いいから早く帰って友達とパブに行きなよ」と笑われたこともあります。



「人生とは何か」「本当の幸せとは何か」。異国の地で深く考えさせられる一方で、現地で倒れている人を見かけた際、語学力のなさから何もできず、強烈な無力感を味わいました。その時、「私はやっぱり、看護という仕事を通して人の役に立ちたいんだ」と、自分の原点を再確認したのです。

帰国後、すぐに起業はされなかったのですね。

はい。まずは、アイルランドで得た新しい価値観を、日本の医療現場でどう活かせるか試したいと思いました。そして新たな挑戦の場として東京を選びました。東京では心臓外科で有名なニューハート・ワタナベ国際病院に勤務する傍ら、意識的に医療業界以外の人々、特に経営者やフリーランスの方々と交流しました。

彼らは皆、自分の仕事に誇りを持ち、心から楽しんでいました。その姿に触れ、「仕事は辛く厳しいもの」という私の固定観念が溶けていくのを感じました。同時に....



続きはQRコードからアクセスしご覧ください → → →